

【論文】

# ソーシャルワーカーの地域福祉実践活動の意義とあり方に関する検討

～精神保健福祉ボランティア講座の運営を通して～

中村 卓治

A Study on the Significance of Social Workers' Practical Activities in Community Welfare  
～Through A Volunteer Course in Mental Health～

Takuji Nakamura

ソーシャルワーカーは、地域福祉実践を行うことにどのような意義を感じ、どのようにその体験を日常業務へ還元しているのか。H市精神保健福祉ボランティア講座の実行委員に対する面接調査により、地域福祉実践の意義とそのあり方について検討する。

キーワード：ソーシャルワーカー、ボランティア講座、障害当事者、地域福祉実践、存在価値、目的の明確化

## I はじめに

### 1. 研究の動機と目的

#### 1) ソーシャルワーカーの地域福祉実践

筆者は、自らのソーシャルワーク実践の経験から、地域福祉実践はソーシャルワーカーの成長において必要不可欠な取り組み項目であると結論づけている。

例え所属機関が入所・入院型施設であろうとも、利用者の生活のあり様を考える上で必要となる視点やヒントは、地域福祉実践の経験を通して培われると考える。但し、ここでいう地域福祉実践とは、ケースワーク（個別援助技術）における地域生活支援とは少し異なる。個別ニーズの充足にとどまらず、ニーズの一般化を図る上で必要となるコミュニティワークやソーシャルアクション、ソーシャルワークリサーチ等の間接援助技術を活用して、利用者の地域生活領域の拡大や改善のための啓発活動、社会資源の基盤整備や開発など、とすると日常業務では優先順位として後回しにされやすいソーシャルワークレパトリー

をここでは地域福祉実践と位置づけて考えたい。ソーシャルワーク実践にケースワークを抜きにした利用者の社会復帰支援や生活支援はあまり考えられない。しかし、その反対にほぼケースワークを中心とした直接援助しか展開しきれていないソーシャルワーカーは増えてきているのではなかろうか。しかも活動場面も所属施設内に限定される傾向にある。

国家資格化を数十年前に果たした現在のわが国では、ソーシャルワーカーの数は増えてきている。社会から求められるニーズも高まり、活動領域も拡大している。しかし、それに比して地域のフィールドを駆け回るソーシャルワーカーが増えているかといえば、その実感には乏しいものがある。

筆者が精神科ソーシャルワーカーとして病院へ入職した当時は、職場内においてソーシャルワーカーの確固とした位置づけはなく、求められる役割もあいまいな状況にあった。だからこそ、有り余る時間の中で、患者と共に時間を共有する生活を送

ることができたし、院内外を問わず様々な人達とのつながりの機会を大切にしようとする意識も高かったのだと思う。特に精神障害者の地域生活に対する既存のサービスが不足していたことで、新たな社会資源の開発のために横のつながりを求める必要もあった。その分、必然性の高い地域での福祉実践は自らの拠り所となる魅力的な活動が多くあった。

一方、最近の現場の状況へ目を向けると、ソーシャルワーカーの国家資格化に伴う職域の拡大や役割の明確化により、右も左もわからない入職間もないソーシャルワーカーでさえ、即戦力としての働きが求められている。このような状況にあつては、たとえソーシャルワーカー達に地域福祉実践への関心があったとしても、当分の間は所属機関内での業務で手一杯になるのかもしれない。環境的要因で語ってしまうとそのような見方も一理ある。しかし、利用者と共に生活を創造する役割にあるソーシャルワーカーは、地域場で自らの実践を見つめ、客観的に所属機関の果たす役割を考えるスタンスを失ってほしくはないと強く思うし、青木<sup>1)</sup> (1999) もいうように、地域社会の視点を所属機関内へ持ち込むことこそが、ソーシャルワーカーが施設に存在している価値なのではなかろうか。

さらに、こうした責務としての一面だけでなく、地域福祉実践を展開するソーシャルワーカーに対して、その活動から得る何らかの成果や恩恵が必ず存在することも忘れてはならない。援助する側としての役割がそのまま対象者に対する一方的なエネルギーの放出に終始するとは限らないのである。効率性で語れば、院内や施設内で業務を完結したほうが賢明であろう。しかし、筆者の体験からすれば、ソーシャルワーク実践の礎と呼べる体験の多くは、効

率の面で後回しにされやすい地域福祉実践であったことは間違いのない事実なのである。

## 2) 地域福祉実践としてのH精神保健福祉ボランティア講座

ここに、筆者が前職からかわり続けている地域福祉実践がある。H市で毎年実施される「H精神保健福祉ボランティア講座（以下、当講座）」である。1994年開始以来、毎年活動が続けてきた地域福祉実践で、今年で17年目を迎える。当講座は、H市内にある医療機関や福祉施設、行政機関や社会福祉協議会などのフォーマル・サービス（専門職）と、講座修了生や精神障害当事者（以下、障害当事者）などのインフォーマル・サービス（地域住民）とで組織される「H市精神保健福祉ボランティア講座実行委員会（以下、当実行委員会）」が企画・実施を行う。H市から事業を委託される形で地元の地域生活支援センターが主催を担い、そこから各関係機関へ向けに当実行委員会への参加要請が行われている。

当実行委員会の活動は当時の筆者の地域福祉実践において中核をなしており、拠り所であり、また専門職としての成長の場でもあった。ともすれば院内業務だけで完結しがちな自らの実践の矛先を地域へ広げ、地域住民や障害当事者との交流を通して彼らの生の声を伺い、地域社会というフィールドから所属機関のあり方や自己の役割を問うことのできる、地域福祉実践に求められる要素がふんだんに盛り込まれた活動であった。十数年の歳月の中で数百名もの精神保健福祉ボランティアを誕生させた当講座は、H市における啓発事業や人材育成事業として、地域の社会資源的な役割を現在も果たし続けているのである。

### 3) 本研究の目的

当講座には現在まで各機関に所属する多くのソーシャルワーカー達が実行委員としてかかわってきたが、彼らが地域福祉実践として本活動をどのように位置づけ、どのような意義を感じているのかについては、個々の具体的検証には至っていない。

果たして筆者が当講座を通して感じたような地域福祉実践の魅力や成果を、世代や時代背景の違いを超えて、若い世代のメンバー達と共有することはできるのだろうか。支援を行う立場にある者たちが、その支援活動を通して受ける恩恵や成果とは一体どのようなもので、その実感を高める要因はどのようなものなのであろうか。地域福祉実践としての当講座実行委員会の活動に注目し、それがソーシャルワーカー達に与える意義について検討を行う。

### 2. 研究の方法

当実行委員会のメンバーへ個別に面接を行い、その分析を基にして検討を行う。

面接の対象者は、現在、当講座にかかわりをもつ実行委員で、所属機関で相談援助業務を担う専門職者（以下、ソーシャルワーカー）を評価対象とする。<sup>注1)</sup>

面接対象者に対しては、調査項目を事前に提示しておき、調査当日は個別に構造化面接を行う。

調査項目は大別すると以下の2点となる。

① 当実行委員会での活動がその後の福祉実践に活かされていると感じるものとその効果

② 当実行委員会での活動で育まれた人間関係の効果を実感する場面

### 3. 先行研究

#### 1) 精神保健福祉ボランティア講座とは

精神保健福祉ボランティア講座は、一般市民の受講生が互いに啓発し合いながら、障害者と共に生きる地域社会を作することを目的として全国で開催されている。<sup>注2)</sup>

講座の修了生の中には、障害当事者の生活を支え、障害当事者と共に生きる社会作りをめざし具体的な活動をする者もあり、精神保健福祉ボランティアと呼ばれる。

精神保健福祉ボランティアは、「精神障害者が抱える生活上の問題を自分とかかわりのある課題として捉え、その解決や支援において相互に協働する諸活動を通して、ともに住みやすいコミュニティづくりに参画する人」(栄<sup>2)</sup> 1998)と定義づけられており、障害当事者が孤立しがちな社会の中で以下の四つの機能を発揮させることなどが求められる。(石川<sup>3)</sup> 2001)

①精神障害者の生活の質を高める機能、  
②精神障害者と市民の橋渡しの機能 ③  
ボランティア自身の成長の機能 ④共に  
生きるという市民感覚で付き合う機能。

精神保健福祉ボランティア講座をわが国で初めて開催したのは、神奈川県である。<sup>注3)</sup>そこでの取り組みは様々なメディアで紹介され、その後全国各地の社会福祉協議会や精神保健福祉センターなどが中心になって精神保健福祉ボランティア講座を実施しはじめた。

わが国は諸外国に比べると、一般市民の精神保健福祉に対する認識や関心の度合いが極端に低い状況にあるため、具体的な活動を行なうボランティアの人材育成としてだけでなく、精神保健福祉領域を取り巻く状況に関心を持ってもらうための普及啓発に目的を絞った講座を開講するところも数多くある。<sup>注4)</sup>

#### 2) 当講座の意義とは

当講座を実施することの意義に関しては、講座開始十年を経過した段階において、



当実行委員会として以下のような総括がなされている。(中村<sup>4)</sup> 2006)

①市民に対する普及啓発の場として

これはただ単に精神障害者に対する理解や協力を求めるといったものではない。メンタルヘルスという観点からいえば、精神保健福祉は国民の誰もが関心と責任を持つべき領域である。ライフサイクルを学び、自己の心の健康に関心を持つことが、精神保健福祉を「他人事」から「自己の問題」として取り組むためのきっかけを与えることとなる。

②障害当事者の支え手に対するサポートの場として

当講座を始めたころの受講生の多くは、障害当事者家族や民生委員など、精神障害者に対しなんらかの関係を以前より持っ者の参加が多くあった。これは保健師や作業所職員の働きかけによるものであったが、障害当事者の身近にかかわりを持つインフォーマル・サービスとしての彼らが正しい知識を持ち、また当講座内で自分たちの気持ちを開示しそれが受容されることで、障害当事者へのかかわりに違いが生まれてくることは大変重要なことである。

③障害当事者自身の自己受容の場として

障害当事者自身が講座の講師を担い、実行委員として企画・運営に携わるといった経験が、自らの障害を受容し、自己に対する理解を深める機会となる。

④サービス提供チームの熟成の場として

考えられる限りのサービス提供機関を召集しさえすれば、それでチームとして効果的なサービスを即展開できるといったものではない。個別援助と同じく、対象者に対しかかわりを重ね続ける中で、徐々にサービスとしての質を熟成させていくものである。

⑤実行委員各々の本来業務への還元

当講座で体験した出来事やそこで築いた人間関係は、所属する機関や本来業務にも生かされ、様々な効果をもたらすことになる。

⑥実行委員の専門性に対するフィードバックの場として

当講座を障害当事者や地域住民の真のニーズを受け止める場として、実行委員自身の専門性を振り返り、実践を問いただす機会とすることができる。

⑦サービス開拓の場として

当講座が普及啓発の次に目指すものとして、障害当事者を支えるサービスの開拓があげられる。実行委員がサービス提供チームとして質を上げること。かかわる障害当事者が社会的役割や責務に目覚めること。受講生である民生委員や精神科領域に従事する者が、かかわりの質を上げること。そして、今までかかわりのなかった一般市民がボランティアとして地域におけるインフォーマル・サービスの役割を担うこと。当講座はそのきっかけの場となりうるのである。

この中で④～⑥に関しては、個々の実行委員に還元されるものであり、今回の調査に関連する項目でとして考えられる。

## Ⅱ H精神保健福祉ボランティア講座の概要

### 1. 活動の経過

#### 1) 誕生の経緯

そもそも当講座誕生の発端は、地域の小規模作業所にかかわりを持つボランティアから、「精神障害当事者へのかかわり方がわからない」とあがってきた問題に応える形で、地域保健所が地域精神保健活動の



一環として当事業に着手したことに端を発する。

地域保健所の保健師、社会福祉協議会のコミュニティワーカー、小規模作業所の指導員、地域家族会の役員、そして医療機関のソーシャルワーカーとしての筆者といったメンバーで実行委員会が結成され、1993年にH精神保健福祉ボランティア講座の開催へ向けた準備が始まった。翌年、1994年に第1回目のH精神保健福祉ボランティア講座が開催され、その後主催を社会福祉協議会や地域生活支援センターなどに移しながら、今年で18年目を迎える。

## 2) 実行委員会の体制

当実行委員会のメンバーは、H市内の精神科領域に関係する施設や行政機関の職員で構成されている。もちろん全ての機関が開始当初から参画しているわけではなく、人的余力のないクリニックやソーシャルワーカーのいない医療機関は当初参加をしていなかった。しかし、18年経った今ではH市内にある精神科領域の関係機関のほとんどが当講座運営へ携わり、その他にも精神障害当事者や当講座修了生も参画することのできる組織へ成長を遂げている。

## 3) 講座の方向性

当講座を開始した当初は、精神障害者に対する理解を求めることを講座の大きな目的にすることに何の疑問を抱くことはなかった。しかし、講座の方向性を単に精神障害当事者に対する理解にとどめてしまうことは、障害当事者に対する同情を高めはするが、精神障害やメンタルヘルスの問題が受講生にとって他人事になる危険性を高めてしまうことが、回を重ねる中で明らかとなった。

また、精神保健福祉に対する「普及啓発」

と「人材育成」といった目標をひとつの講座で両立させることの困難性も明らかとなった。

そのため、現在では「精神保健福祉ボランティア講座」と称しながらも、「ボランティアとはお互い様の人間関係を築くこと」と位置付け、受講生が自身を大切にすることを意識を持つことや、自らが暮らす地域社会に関心を持ち、自分なりの形で地域に貢献する（関わりを持つ）ことの必要性を理解してもらうことを当講座の目的に位置づけた。換言すれば、精神保健福祉領域の現状を知り、知識を蓄え、心の健康に関心を持つことを通して、受講生が自らの存在をかけがえのないものであると感じたり、周囲との人間関係を捉えなおすためのきっかけの場として当講座を設定したのである。そのため、あくまで基本的に「受講生自身」と「自らが生きる地域」に焦点を当て、当講座修了後のボランティア活動に対しては、受講生の内発的動機が高まったときに活動の支援をすることにして、その関心を高める講座作りに努めている。<sup>注5)</sup>

## Ⅲ 実行委員の回答

### 1. 面接の項目

面接実施期間は平成22年8月下旬から9月中旬。所属機関の異なる5名のソーシャルワーカーに各々40分程度の構造化面接を行なった。聴取項目に関しては以下の通りである。

#### ① 基礎情報

- a) 通算による福祉実践キャリア
- b) 当実行委員としてのかかわりを始めた時期

② 当実行委員会での活動体験が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

表1 インタビュー内容の概要

	所属機関種別	福祉実践の期間 (実行委員の期間)	【上段】 当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの
			【下段】 当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの
A 氏	社会福祉協議会	14年目（3年半）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■作業を行う意図（必然性）を常に自覚するようになったこと</li> <li>■プログラムの実施は手段であり目的ではないことへの気づき</li> <li>■対象者の立場に合わせたかかわり方の工夫を行うようになったこと</li> <li>■サービス活用至上主義からエンパワメントを志向した支援への転換</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■支援の連携を通じた精神障害当事者とのかかわりの質が向上したこと</li> </ul>
B 氏	精神科病院	3年目（1年半）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■自分の考えを吟味した上で表現すること</li> <li>■対象者に合わせた表現方法の重要性</li> <li>■他者に伝える役割を持った上で取り組む学習効果の高さ</li> <li>■「患者」とは異なる側面への気づきを得ること</li> <li>■「患者」にまかせる部分を大切にす支援の取り組み</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■一人のひととしての互いの理解から生まれる信頼関係の大きさ</li> </ul>
C 氏	地域生活支援センター	9年目（4年）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■目的をはっきりとさせて行動や発言を行なうこと</li> <li>■事前準備や意識的な打ち合わせの必要性の実感</li> <li>■各機関の入り口、調整役としての機能を果たすこと</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■各機関の入り口、調整役としての機能を果たすこと</li> </ul>
D 氏	精神科病院	6年目（4年半）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■人前で話せるようになった事</li> <li>■他者へ説明をすることの難しさと大切さへの気づき</li> <li>■メッセージに一貫性を持たせること</li> <li>■行動の意図・目的をはっきりさせること</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■連絡のとりやすさ</li> <li>■障害当事者からの支え</li> </ul>
E 氏	多機能型事業所	7年目（2年半）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■目的や意図を明確にした言動を意識すること</li> <li>■言動を発する前の準備の大切さ</li> </ul>
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■連絡・連携の取りやすさ</li> <li>■ネットワークの広がり</li> </ul>

当実行委員会での実施準備や講座運営といった体験が、所属機関における日常業務の場面にどのように活かされているかについて問う。

③ 当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されている

と感じるもの

当実行委員会のメンバーと同じ目標に向かい時間を共有した体験が、所属機関における日常業務の場面にどのように活かされているかについて問う。

## 2. 各面接の概要

5名の実行委員の基礎情報及び面接の回答概要を表1にまとめた。以下、各実行委員の回答内容に続く。

#### 1) A氏(男性)の場合

① a) 通算による福祉実践キャリア：14年目

b) 当実行委員としてかかわりを始めた時期(活動期間)：3年半前より(3年半)

② 当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

a) 作業を行う意図(必然性)を常に自覚するようになったこと

開始当初に会の「目的」を設定するだけの会議はたくさんあるが、常にそれを意識して作業を進めていくものは少ない。当実行委員会は、目的を意識した作業の徹底がなされており、その目的に即した段取りで何事も作業が進められていた。目的を明確にし、それを意識したかかわりは日々の実践にも活かされており、取り組み作業へのモチベーションの維持に役立っている。

b) プログラムの実施は手段であり目的ではないことへの気付き

この手の講座では、グループワークや意見交換会といったプログラムは当たり前の流れとして以前から認識していた。しかし、当講座ではグループワークを行う目的までもが各回毎に明確に設定され、その目的は受講生にも提示されて実施していたため、受講生もそのつもりでグループワークに取り組み、講座全体の内容に一貫した流れを持つことができた。

このことを通して、プログラムはあくまで手段であり、その目的により活用方法が変わってくることを学んだ。

c) 対象者の立場に合わせたかかわり方の工夫を行うようになったこと

実行委員としてともに活動する障害当事者や一般市民に対しては、立場の対等性を意識するとともに配慮も必要であることを学んだ。例えば専門家の間で当たり前に使われる専門用語を極力さけ、インフォーマルな立場であってもなるべくわかりやすい表現に努めるようになった。このことは機関に訪れる市民に対する窓口対応などに変化をもたらした。

また、「この種の要望に対してはこれ」というほぼパッケージングされた短絡的な支援展開だったものが、支援レパトリーを増やしたり改良を重ねながら、いくつかの選択肢から選んでもらうようになった。様々な立場が集う当実行委員会での活動を通して、立ち振る舞いに幅が生まれた成果であると思う。

d) 既存公的サービス活用至上主義からエンパワメントを志向した支援への転換

種々の支援会議に参加した際、公的サービスの活用方法自体に重きが置かれたり、対象領域で活用サービスを限定してしまい、利用者・家族の要望や持っている力が上手く反映されていないように感じる場面に出くわすことがある。短絡的に公的サービスに結びつけることが真の生活支援やケアマネジメントが目指しているものではなく、障害当事者の持つ力の活用やそれを引き出す場を設定し、それを上手く支援に反映させることが先決であると感じるようになった。いわゆるエンパワメントを志向した生活支援である。当実行委員として



活躍する障害当事者の魅力的な姿や、意識的に彼らにかかわり個々の力を導き出そうとする他の実行委員の姿勢からその視点の重要性をさらに意識するようになった。

- ③ 当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

- a) 支援の連携を通じた精神障害当事者とのかかわりの質が向上したこと

社会福祉協議会の特性上、受け入れの間口は広い。その中にももちろん精神障害者の方々とのかかわりも含まれるが、正直一機関としての支援の限界もある。そんな中、精神科領域の専門家たちと面識があることは心強い。気軽に相談だけでなく、場合によっては、役割を肩代わりしてくれたり、すぐに現場へ駆けつけてくれたりと非常にフットワークよく協力をしてくれる。連携が取りやすいため、自分自身が精神障害者の方々と安心してしっかりかかわれるようになったし、そうすることで対象でひとまとめてしまうことなく「個人」としてみつめることができるようになった。

## 2) B氏(女性)の場合

- ① a) 通算による福祉実践キャリア：3年目

- b) 当実行委員としてかかわりを始めた時期(活動期間)：2年半前より(1年半)

- ② 当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

- a) 自分の考えを吟味した上で表現すること

様々な立場の者で構成される当実行委員会では、他者に自分の考えを的確に伝えることが求められた。その作業は、日常業務におけるケース対応の際、話の筋道を立てたり、自分が伝えたいことや話の結論を明確にして、事前に頭で思い描きながらといった、一度自分の中で吟味して実際の行動へ移す姿勢につながった。

- b) 対象者に合わせた表現方法の重要性

相手に自分の考えを述べたり物事を説明する際に、相手に合わせた表現方法を考えるようになった。他者が納得のできる説明、理解できる言葉を意識するようになった。実行委員だけでなく、受講生の内訳も非常に幅があり、個々ができるだけ納得できるように知識の提供をしたり、話し合いを積み重ねる体験の成果であると感じる。

- c) 他者に伝える役割を持った上で取り組む学習効果の高さ

当講座でひとつの講義を担当するために準備を行った際に、現場での実践を関連付けながら作業を行うことができ、大学での学びとは違う深い学習ができた。また、他者に伝える役割を伴っての学習は、自分だけが理解すればよいものではないので、自分の理解したことを「伝える」ということの難しさを実感することができたのは大変良い体験であった。

- d) 「患者」とは異なる側面への気づきを得ること

所属機関の利用患者とともに当講座の実行委員として活動することにより、患者にも力があるということを単なる知識としてではなく、体験として実感できたことは生活支援を展開する者として大きな収穫であった。同じ対象者であっても、一緒に事業を進めていく中で、

病院を利用する患者とは異なる一面が見えたことは、エンパワーメントを志向した支援を展開するための筋道が見えた気がする。また、病院という機関の中では中々把握しづらい、多面的に人や生活を捉えていくことの重要性にも気づくことができた。

- e) 「患者」にまかせる部分を大切にす  
る支援の取り組み

上記の続きとなるが、当講座の運営を通して気づかされる彼ら障害当事者の力を実感してからは、日常の支援においても患者個々の持つ力の「見立て」を行うことを意識するようになった。患者のできないことや不自由さ、生活課題を注視するだけでなく、できることは患者に任せることで責任感や自信、力を引き出す支援の形を意識するようになった。

- ③ 当実行委員会で培われた人間関係が、  
個々の日常業務において反映されている  
と感じるもの

- a) 一人のひととしての互いの理解から生ま  
れる信頼関係の大きさ

一つのことを皆で作っていく作業を通して、信頼関係を築くことができた。時間の共有を図る中で、それぞれの機関としての立場だけではない素の人間性や個々の生活背景が理解できたことで安心して自分の考えを述べるできるようになった。こうした理解は、対利用者に対してだけでなく、連携を必要とする援助者同士にも必要なものであることを実感した。

### 3) C氏（男性）の場合

- ① a) 通算による福祉実践キャリア：9  
年目

- b) 当実行委員としてかわりを始め

た時期（活動期間）：5年半前より  
（4年間）

- ② 当実行委員会での活動が、個々の日常  
業務において反映されていると感じる  
もの

- a) 目的をはっきりとさせて行動や発言を  
行なうこと

当講座実行委員会での活動は、あらゆる面における動きや発言が当初の目的に合わせたものであり一貫性を感じた。以前の自分は見切り発車的に行動を起こしながら、その最中に物事を考えることが多かったが、当講座にかかわるようになってからは、その作業を行う理由や集う目的等を自分自身の中で明確にさせてから行動を起こすようになった。結果、日常業務における利用者へのかかわりやケア会議での発言や行動等に目的とのズレが少なくなった。

- b) 事前準備や意識的な打ち合わせの必  
要性の実感

他の地域福祉実践などを行う際には、決められた日時に集まって話をする以上の作業の必要性を感じていなかったが、当実行委員会活動を通して議題の中心となる者同士の事前の打ち合わせや根回しといった作業、意識のすり合わせやビジョンの統一化が他の参加者の理解を促進させ、効果的な会の運営を実現させることを実感した。

- ③ 当実行委員会で培われた人間関係が、  
個々の日常業務において反映されている  
と感じるもの

- a) 各機関の入り口、調整役としての機能  
を果たすこと

実行委員同士は気兼ねなく連絡・相談ができる関係であるため、直接関係することでもなくともお互いが所属する機関

に関する相談にのってもらい、アドバイスや関係調整を行ってもらえるようになった。いわば各機関の窓口的な役割を果たしてくれている。こうして専門職が横の連携を取りやすくなることは、我々が環境の一部となるかわりのある利用者にとってもその恩恵は大きいものであると考える。

#### 4) D氏（男性）の場合

- ① a) 現在の実践キャリア：6年目  
b) 当実行委員としてかわりを始めた時期（活動期間）：5年半前より（4年半）

- ② 当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

- a) 人前で話せるようになった事  
本来、人前で話しをしたり司会をすることは決して得意な方ではなく不向きだと思っていたが、当講座の中でこうした事への取り組みの機会をもらい、出来不出来よりも自分の持ち味を生かしながら精一杯取り組んだことを、他の実行委員達から肯定的に評価されたことが嬉しかった。また、受講生にも支えられることも大切というスタンスの示唆もいただき、ずいぶん気持ちが楽になった。よって、日常業務のあらゆる場面でこのような役割を求められた時は、自らの成長の機会と位置づけ、抵抗なく受け入れることにしている。

- b) 他者へ説明をすることの難しさと大切さへの気づき

当講座の中で受講生からの質問に応じたり、精神保健福祉の歴史の講義を担当する機会を得た。その体験を通して「自分が知っていること」と「知ってい

ることを他者に説明すること」は別の力が求められることを実感した。そのため、患者等に福祉制度の説明をする際にもわかりやすい言葉を選んだり、作業の事前準備を行なうようになった。また、自分の知識を他者の前で表現する場があることは、学習への取り組み姿勢を変える事への気付きも得た。

- c) メッセージに一貫性を持たせること

物事を運営する側の者達が同じ目標を持ち、表現は異なれど同じ内容のメッセージを語ることは、そのサービスを利用する者たち(受講生)にとっても、自分たちが何を受け止めればよいのか、どう振舞えばよいのかを掴みやすく、利用者の満足度やかかわりの効果が高まることを学んだ。

- d) 行動の意図・目的をはっきりさせること

日々の業務における利用者への働きかけの際に、何をどのように伝えたらよいかについて具体的に考えるようになった。以前は勢いに任せ、利用者へ説明しながら次を考えるような作業を行っていた。なぜそれをやるのか、意図や目標は何なのかをまず自己問答し、自身で消化してから利用者へ話を持っていくようになった。これは当講座の中身や流れに関して、実行委員の間でその目的や意図を明確にしていくことに、必要以上にこだわった作業が生きている。

- ③ 当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの

- a) 連絡のとりやすさ

もともと電話で連絡をとることは好きではないが、当実行委員に対しては抵抗がなくなった。私生活での付き合いも生まれ、一人の人として気心の知れた、



顔の見える関係はとても安心感がある。

b) 障害当事者からの支え

障害当事者の人にも当実行委員会の  
中では支えてもらったり、助言を受ける  
場面が多々あり、医療機関ではあまり実  
感する場面の少ない、双方向の関係が大  
変新鮮である。

5) E氏(女性)の場合

① a) 現在の実践キャリア：7年目

b) 当実行委員としてのかかわりを始め  
た時期(活動期間)：2年半前より  
(2年半)

② 当実行委員会での活動が、個々の日常  
業務において反映されていると感じる  
もの

a) 目的や意図を明確にした言動を意識す  
ること

いままで参加してきた種々の会議で  
は、目的について初回で触れることはあ  
っても、その目的に即した意識的な作業  
を継続して行うことまで体験したことは  
なかった。当実行委員会では目的に即  
した意図的な作業が常に大切にされて  
いた。他者へ何かを伝える際には明確な  
目的や理由付けが発信者側で吟味され  
た上で発信されることで、他者が理解や  
納得を示しやすくなることを学んだ。日  
業務では、後輩や職員、利用者に物事を  
伝える際に、自分の中で目的や意図を確  
認してから行うことを意識するようにな  
った。

b) 言動を発する前の準備の大切さ

他者にメッセージを発信する前に、一  
度自分自身の頭の中へ落として吟味す  
るようになった。専門職として、自らの  
発言に対して他者から「なぜ」と問われ  
た時にその求めに応じられる準備が大

切である。その準備作業を意識し始めて  
から、次第に自分が発する言葉の意味が  
理解できるようになった。実は今までは  
整理がつかないまま説明を始めてしま  
い、自分で言っていて途中で收拾がつか  
なくなったことがあった。今でもそうい  
うときはあるが、「これは相手に伝わら  
ないだろう」と発言している最中でモニ  
ターができるようになった。

この意識は、当実行委員会の会議でも  
意識させられたが、講座受講生や専門職  
ではない障害当事者の実行委員たちと  
のかかわりが力になった。彼らに対する  
かかわりでは、彼らが理解できる言葉に  
ついて吟味しながらそれを都度選び直  
し、納得できるように筋道を立てて説明  
をすることが求められた。その作業の積  
み重ねの成果であると考ええる。

③ 当実行委員会で培われた人間関係が、  
個々の日常業務において反映されてい  
ると感じるもの

a) 連絡・連携の取りやすさ

実行委員の間では、日常業務におい  
て機関同士の連絡・連携が取りやすくな  
ったし、接触の機会も増えた。同じ市内  
ではあるが、自らが所属する機関は中心  
地より少し外れた場所にあるため、他の  
機関とは日常業務の中で頻繁に行き来  
できる距離ではない。もし当講座での出  
会いがなければ近くにある精神科病院  
としか関係をもてない状況にあった。当  
講座が物理的な距離の問題を解決して  
くれた。

b) ネットワークの広がり

当実行委員との関係が深まったのは  
いうまでもなく、彼らの存在が窓口や仲  
介役となり、その先にいる他のスタッフ  
や関係者とつながることができた。実行  
委員同士が気心の知れた安心できる関

係だからこそ、気兼ねなく紹介しあえたのだと思う。

## IV 回答の分析

### 1. 共通言語化によるキーワード

5名の実行委員の証言内容の共通言語化を図ることにより、表2-1及び表2-2のようなキーワードがあがってくる。表2-1はインタビュー項目②の「当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」について導き出されたキーワード、表2-2はインタビュー項目③の「当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」について導き出されたキーワードとなる。

表2-1

「当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」に関するキーワード	
A	目的の明確化と意識付け
B	意図を持ったプログラム（作業）の展開
C	専門用語の一般化
D	個別化された相手に合わせた対応
E	エンパワメントやストレングスに注視したかわり
F	発言内容の事前整理
G	他者へ伝える役割に基づかれる学習の成果
H	役割への取り組みによる成長
I	肯定的評価の重要性
J	チーム全体が持つメッセージの一貫性

表2-2

「当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」に関するキーワード	
K	連携（連絡）のとりやすさ
L	立場を越えた人としての信頼関係
M	各機関の窓口・コーディネーター役
N	精神的な支え

ちなみに、これを証言者ごとにまとめてみると表3のようになる。

### 2. 分析

ここでは複数回答が寄せられた項目に注目し分析と解説を加える。

#### 1) 「当実行委員会での活動が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」について

##### ① 事業の目的の明確化

ほぼ全員からあがってきた項目である。集った者たちが、何を目指してあるいは何を達成するために時間を共有するのか、その目的を明確にすること。そしてそれを初回のみの作業としてではなく、常に認識できるようメンバー全員の意識に根付かせていくことが大切ということである。

ソーシャルワーカーの日常業務において、形式的な会議や実施ありきのイベントへの参加は決して少なくない。「運営委員会が機能せずに、講座も受講生もバラバラと崩れてしまう場合もある。その一番の理由は、経験が乏しいことではなく、委員一人ひとりの目的意識の乏しさに尽きる。他でボランティア養成をしているようなので、他市の内容を真似て講座をやったという姿勢からは何も生

表3 各実行委員が該当するキーワード

	所属機関種別	福祉実践の期間 (実行委員の期間)	【上段】 表2-1に該当するキーワード
			【下段】 表2-2に該当するキーワード
A 氏	社会福祉協議会	14年目（3年半）	A B C D E
			K
B 氏	精神科病院	3年目（1年半）	C E F G
			K L
C 氏	地域生活支援センター	9年目（4年）	A B
			K M
D 氏	精神科病院	6年目（4年半）	A F G H I J
			K N
E 氏	多機能型事業所	7年目（2年半）	A C F
			K M

まれない。」（石川<sup>5)</sup> 2001）とあるように、目的が明確でないものは次第に形骸化・衰退化していく。特に当講座のように単発事業と違い、長い年月をかけて準備・運営されるような事業の場合、かかわる者の意識統一やモチベーションを持続させる仕組みづくりは重要であり、本項目はその要素の中核をなす。何より、利用者に対するかかわりや展開するプログラムの質が変わってくるはずである。

## ② 意図を持ったプログラム（作業）の展開

われわれが日常業務において展開する各種プログラム（作業）は、目的を達成するための手段であって、その実施自

体が目的であってはならない。例えばA氏の回答にあった当講座のグループワークも、講義を聴いた流れで漠然としたグループワークを設定するべきではない。グループワークの中で何を話し合ってもらいたいのか、その作業にはどのような目的があるのかを受講生に提示して、その意図を理解してもらった上でグループワークを展開する。そうした姿勢が受講生に主体性や当事者性を芽生えさせるのである。受講生に協力を求め、ともに講座を作っていこうとする意識が大切となるが、これは日常業務における直接援助場面でも同様のことがいえはしないだろうか。

## ③ 専門用語の一般化



専門用語の一般化とは、専門領域で活用される用語を一般市民でも理解できる表現にアレンジしなおす作業のことである。専門職はキャリアが増すほどに専門用語を多用化する傾向にあり、表現に気を配らなければ、対象者によっては難解な説明になってしまう。当講座においても、実行委員の間で評判がよかった講義内容が、一部受講生から内容が難解すぎると指摘を受けることも少なくない。こうした一般市民を対象にした講座は対象者の幅も広いいため、専門用語に対する表現の配慮が必要であり、それはそのまま日常業務における利用者等のかかわりにおいても同じことがいえる。そのことに当講座の運営を通して意識ができた項目である。

#### ④ エンパワーメントやストレングスに注視したかかわり

対象者の復権や自尊心の回復を目指す支援、あるいは個人の持つ力や可能性に注視したかかわりは、最近のソーシャルワークにおいて基盤となる考え方であるが、その理論を実践に結びつけることは容易ではない。しかし我々は幸運なことに、当実行委員である障害当事者達が講座の運営を通して復権を果たし、自らの社会的役割に目覚めるまでのプロセスを仲間として間近で見届けることができた。その体験を通して、例えば支援計画であればまずは障害当事者自身のセルフケア能力をしっかりとアセスメントすることであったり、ケースワークにおいても利用者自身が担うことのできる役割を見出すことなど、利用者の力や役割に注視する日常実践へつながったものと考えられる。

#### ⑤ 発言内容の事前整理

専門職として支援業務を行う際には、意図的なかかわりが求められる。意図的

なかかわりとは、働きかけの目的が明確で、意味のある言動を行うことである。そこが、インフォーマルな関係とは異なる専門家たる所以である。言葉を発する前に、自らのメッセージを吟味する。どのように説明をするか、相手の心情や理解度等もアセスメントする必要もある。実行委員は、当講座を通してその作業の難しさと重要性に気づかされたのである。

#### ⑥ 他者へ伝える役割に基づく学習の効果

筆者の実践経験においても実感していることであるが、目的が明確でない学習は中々身につかない。しかし、例えば学生の間にあれだけ身につかなかった福祉制度の勉強が、利用者支援において急に必要となり、精神的に追い込まれながら学習した場合、自らの専門知識として血肉になっていく。これと同じような体験はあらゆる専門職が体験済みであろうが、当講座においては対象に幅のある大勢の受講生を前にして行うことにさらなる難しさがある。個別の反応を確認しながら対応するというわけにいかないだけに、説明内容を事前に吟味しなければならない。また、自らが理解しているということと、わかりやすく言語化できることとは求められる力が異なってくることへの実感も大きい体験であったと考えられる。それだけに、大衆へ向けて表現するための学習は意義深いものであったと考えられる。

### 2)「当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されると感じるもの」について

#### ① 連携（連絡）のとりやすさ

全員からあがってきた項目である。当実行委員会で顔の見える関係を作ることにより、気軽に連絡や相談を行い、支

援に関しては連携をとれるようになることは大きな恩恵といえる。専門職間の人間関係は、そのまま利用者にとっての生活環境でもあり、その関係性が利用者支援の質につながることは前述の通りである。

## ② 各機関の窓口・コーディネーター役

実行委員の所属する機関に別件で用がある場合、その情報収集や連絡調整を担い合う関係が成立していることは、頼もしい限りである。また、実行委員を通じて必要な人材の紹介があったりと、単に実行委員同士のつながりにとどまらないコーディネーターとしての役割を担いあっている点も、日常業務への恩恵としては非常に大きなものがある。

## V ま と め

### 1. 地域福祉実践に必要なもの（総論的見解）

今回の調査を通して、当実行委員会へ携わるソーシャルワーカー達が、その活動に何らかの専門的価値を見出し、その経験を日常業務で有効的に活用していることが明らかとなった。また、先行研究で述べた、講座開始十年目で確認した講座実施の意義に合致しているものであり安心することもできた。

彼らの意見の一つ一つは、筆者が期待していた以上に具体的であり説得力に富んだものであった。

面接項目である「当実行委員会での活動体験が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」及び「当実行委員会で培われた人間関係が、個々の日常業務において反映されていると感じるもの」は換言すると、「自らが行っている作業に専門的価値を見出すこと」と「自らが所属する

組織に価値を見出すこと」であり、単純に優先の度合いを比較できるものではなく、どちらも福祉実践には不可欠な項目となる。実行委員の意見からこの二つの調査項目の重要性を総論的に述べるとすれば、ひとつは「目的意識の必要性」である。この組織は何のために存在するのか、どこへ向かうための作業を行うのか、自分たちは何を価値や理念に定めて会を運営するのかといった項目が明確なことである。もう一点が、「所属意識の必要性」である。組織に身をおくことの心地よさや自らの存在を承認されることの喜びなどが更なるメンバー間の絆を深める。

当実行委員会活動は年間を通して行われるが、その活動はすべて無償ボランティアであり、そもそも参加への強制力もない。しかし、当実行委員たちは多忙を極める日常業務の中にあつて、時間を工夫しながらでも会に集おうとする意識が萎えないということは、組織の凝集性や活動の優先順位の高さを物語っているといえる。

今回の調査から明らかとなった、地域福祉実践の意義や効果を高める要因といったものは決して特別な領域の特別の活動だけのものではない。したがって、当講座運営はもちろんのこと、様々な実践活動に応用できるものであると考える。

### 2. 障害当事者の参画がもたらした効果

今回の調査において実行委員から様々な形で口にされたものに、「実行委員としての障害当事者たちの存在の大きさ」がある。日常的に専門用語を多用している我々のあり様。わかったつもりで見切り発車的に利用者へ発言してしまう我々のあり様、そして様々な場面で実感される障害当事者の成長と力と優しさと支え。こうした気づきを与えてくれたのは、当講座とともに運営してくれた障害当事者たちの当講座



に対する真摯な取り組み姿勢である。別の機会で詳細は語ろうと思うが、もちろん彼らとともに歩むためには意識的なサポートも必要ではあった。しかし、「見逃してはならない最も重要な課題は、精神障害という病気の困難さは、単なる制度の不備や社会の無理解ということ以上に、(中略)自らの人生の責任ある当事者として生きるという当たり前のことを、他者による過剰な保護や管理の下に喪失させられてきたことにある。」(向谷地<sup>6)</sup> 2009)と表現されるような精神科処遇の中であって、ともすると聞き流されてしまう障害当事者たちの素朴な要望や意見を当実行委員たちは真摯に受け止め、都度意識的な対応を心がけた結果、専門援助職としての力量を高めることができたのではないかと考える。こうした姿勢は、個別対応が必要な受講生に対する事前検討や組織的支援、あるいは会場全体を捉える中での変化に素早く対応できる臨機応変な対応力へ発展・成長を遂げているのである。

もう一点特筆すべき点がある。それは、ソーシャルワーカーたちが障害当事者たちから学ぼうとする姿勢をもち、支えられていることへの感謝の念を抱いていることである。

向谷地<sup>7)</sup> (2009) のいうように、「当事者とは、単なる『精神障害を抱えた当事者』としての理解ではなく、まさしく精神障害という固有の体験をした一人の市民として、自らのニーズを見出し、社会資源の欠乏や不足の改善と充足に向けた主体としての役割を果たすことを期待された個人を意味する」とするならば、我々専門職とは立場や経験に基づかれた力を異にする者として、障害当事者に対し敬意を払うべきである。

実行委員たちが、ただソーシャルワーカーの専門性に基づき障害当事者を受け止め

ようとしたのではなく、「地域づくりの代弁者として」の敬意を払い、双方向のエネルギーの流れを意識しながらかわろうとした姿勢が、「学び」や「支えられる」といったキーワードに表現されているといえる。

当講座活動に深みや説得力をもたらしたもののひとつは、障害当事者の講座への参画であり、「地域づくりの代弁者」として成長していく彼らを見守り、学ぼうとする姿勢を大切にした実行委員たちのかかわりのおかげであることは誰もが認める事実である。

### 3. 存在を承認しあうことの重要性

援助実践を行う中で、新たな人間関係で形成された組織に身を投じた際に、そこで生まれる人間関係や交わされる情報に刺激を感じることはある。しかし、それだけでは時間的経過とともに新鮮度を失っていく。集まることに意義を持つそうした組織の多くは、かかわる者の所属意識や凝集性を失わせ、やがて形骸化していくわけであるが、単に組織の目的や役割がはっきりしていれば良いというものでもない。専門職としての社会的責務だけで内発的動機を高めることは困難である。やらされ体験からは成果は得にくい。こうして考えると、18年間続いている当講座にはその問題を解決する何かが存在していると考えられる。

今回の面接の中で発言された意見は、ソーシャルワーク実践においてどれも大切なものであった。彼らのこうした気づきや言動は、当講座運営の体験だけがもたらしたものではない。

その体験を積極的に自主的に行わせようとする土壌の存在があった。それは互いの存在の承認であり、そのことを実感させる仕組みづくりである。人は誰もみな自ら



の存在価値を感じながら社会生活を送りたがる。存在を承認してくれる者、存在価値を確認できる役割や作業を求めている。当実行委員会ではその意識を大切にすると共に変化成長に対する肯定的な評価を心がけている。これは障害の有無に関係なくである。お世辞などではなく、心から素直にたたえあう文化が育っているのである。よかったと感じたとき、助かったとき、成長したと感じたとき、がんばったと感じたとき。なるべくタイムリーに、言葉や態度の形にしてフィードバックしていく。今回の面接において様々な意見のベースに一貫して感じた、「自分の存在が認められ、必要とされていること」の心地よさが、取材を通して筆者にも素直に伝わってきた。こうした土壌が育つことが、無償で人を集め、会を率先して動かしていこうとする原動力であったように感じている。

よって、ソーシャルワーカーとしての責務以前に、ひとりの人として個々の存在の必要性が実感され、存在を承認される肯定的な場の確立が、専門性に基づけられた実践を効果的かつ継続的に行っていく上で何より重要であることが彼らのメッセージから見て取れる。専門職であろうと障害当事者であろうと、生きていくうえで必要な条件はみな同じである。支援者としての専門性を高める作業と同時に、こうした「人としての共通性」で物事を捉える一般性や素人性のような感覚を大切にすることで見えてくるものがあることを、対人援助を行う者として大切にしたいと願う。

真の社会生活は地域の中にある。生活に責任を持つ福祉学を学問基盤に持つ専門家として、ソーシャルワーカーにはぜひ、地域福祉実践に参画していただきたい。その際にひとつでも本作業がヒントになれば幸いである。

最後に、筆者にこうした貴重な気づきを提

供してくれた当実行委員の仲間たちに感謝を申し上げ、本検討作業を終了する。

## 注

- 1 当実行委員の中には、他にもソーシャルワーカーがいるが、筆者と共に当講座に初回から携わっているため、今回の調査対象から除外する。
- 2 1980年代にわが国に始めて誕生した時は「精神衛生ボランティア講座」と呼ばれていたものが、「精神保健ボランティア講座」へ、現在では「精神保健福祉ボランティア講座」と時代の流れに伴い名称を変化させている。しかし基本的な目的及び内容に大きな変更は無い。本論文では必要な箇所以外は「精神保健福祉ボランティア講座」で統一した表現を使用する。
- 3 この当時は「精神衛生ボランティア講座」と呼ばれていた。
- 4 普及啓発を目的にしている場合は「精神保健福祉講座」と名づけ、ボランティアの養成を切り離し、目的を明確にして講座を実施している所もある。
- 5 当講座は、受講生に精神保健福祉の現状を知ってもらうための普及啓発の意味合いを強調しているため、必ずしも受講修了生全員がボランティア活動を開始するわけではない。よって、ボランティア実践を希望する者には、かかわりのために必要な自己理解やコミュニケーション技術について学ぶための上位講座の受講を勧めると共に、精神保健福祉ボランティアの当事者組織を地域生活支援センターに設け、ボランティア支援を行っている現状にある。

### 引用文献

- 1) 青木聖久「精神保健福祉士の専門性と今後の課題 病院の立場から」『精神保健福祉』Vol.30,へるす出版,(1999)p19
- 2) 栄セツコ「精神保健ボランティアに関する研究」『社会福祉学』39(1),pp.177-192
- 3) 石川到覚 編「精神保健福祉ボランティア 精神保健と福祉の新たな波」中央法規,(2001) p74
- 4) 中村卓治 監修 東広島精神保健福祉ボランティア講座記念誌作成委員会 編「のびやかな風によってつながって, ひろがって〜東広島精神保健福祉ボランティア講座の10年」東広島精神保健福祉ボランティア講座実行委員会,(2006) pp.2・3 pp.44・45
- 5) 石川到覚 編「精神保健福祉ボランティア 精神保健と福祉の新たな波」中央法規,(2001) p60
- 6) 向谷地生良「統合失調を持つ人への援助論 人とのつながりを取り戻すために」金剛出版,(2009) p158
- 7) 上掲書,p158
- 4) 石渡和美「障害のある人の地域生活と『支え合い』」『月間福祉』第91巻第9号, 全社協,(2008)
- 5) 石川到覚 編「精神保健福祉ボランティア 精神保健と福祉の新たな波」中央法規,(2001)
- 6) 向谷地生良「統合失調を持つ人への援助論 人とのつながりを取り戻すために」金剛出版,(2009)
- 7) 柏木昭 編著「新精神医学ソーシャルワーク」岩崎学術出版社,(2002)
- 8) 藤林詠子「『地域住民』って誰だろう?」『精神保健福祉』Vol.36,へるす出版,(2005)
- 9) 中村卓治「『精神保健福祉ボランティア講座』の価値と課題の検討」『広島文教女子大学紀要』第41巻(2006)
- 10) 寺谷隆子 他「これからの生活支援センターの使命 それぞれの実践からみえてくるものを踏まえて」『精神保健福祉』Vol.32,へるす出版,(2001)
- 11) 柏木一恵 他「精神化病院 PSW の現状から見えてくるもの」『精神保健福祉』Vol.33,へるす出版,(2002)

### 参考文献

- 1) チャールズ・A・ラップ/リチャード・J・ゴスチャ 著「ストレングスモデル 精神障害者のためのケースマネジメント」金剛出版,(2008)
- 2) 小田敏雄「精神障害者の地域生活支援を考える 精神保健福祉士としてのエンパワメントとパートナーシップの実践課題」『精神保健福祉』Vol.41,へるす出版,(2010)
- 3) 全国精神保健研究会 編「精神保健ボランティア 街に風を運ぶ人たち」『ゆうゆう』Vol.23, 萌文社,(1994)